
廃墟と電子の妖精とドリフター

如何家 サイト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

廃墟と電子の妖精とドリフター

【Nコード】

N5838S

【作者名】

如何家 サイト

【あらすじ】

お題【「終電、なくなっちゃったね」で始まり「廃墟」「電子の妖精」「ドリフター」を使って作品を書きなさい】に挑戦しました。雰囲気を感じていただけたら幸いです。

「終電、なくなっちゃったね」

僕は少女の言葉を聞いて振り返る。

錆びた改札口の向こう側には荒廃とした街の跡があった。

改札口の根本から伸びる長いヒビがアスファルトをこじ開けながら僕の足元の点字ブロックをめぐり上げる。

もう一度振り向いてエメラルドブルーの水に沈んだ線路を眺める。水面はそよ風に吹かれて少しだけ波を打ち、太陽の光を反射していた。目が眩む。

まぶたを押さえながら線路の先が深い碧に染まっていることを確認しながら「そうだね」と遅れめに返事をした。

少女はちよつとだけむくれた。

世界がどうあるのかを知りたければ地図を見ればいい。

僕は一枚の地図を頼りにこの世界の街を巡っている。

その街の多くが廃墟。今日もまた廃墟。

「そういうときは』どこかに泊まっていこうか？」って誘うんだよ
お！」

機能を失った改札口を抜け、ところどころのタイルが剥がれた駅前の階段を下りながら少女が手元で喚いている。

少女は自称電子の妖精で今は薄型ゲーム機の中に住んでいる。

「泊まる場所なんてないじゃないか」

こうして音声で会話が可能で、廃墟だらけの世界にはいささか似合わない。

「泊まる場所があったらナビするもん」

「じゃあどうぞ」

「検索件数0件です」

……むしろ廃墟であることを肯定するために存在しているかも知れない。

少女とは数年前の廃墟で、電源が付けっ放しで放置されていたのを僕が拾った仲だ。

「今日はこの街で寝る」

廃墟であっても街と呼ぶのは自分の心を保つためだ。廃墟で寝ると思うだけで気分がよろしくない。僕もそのまま朽ちてなくなりそう気がしてくる。

途切れた階段をひとつ飛びして浅い水たまりに着地すると水しびきが跳ねる。

「探索しよっか」

廃駅前の広場からアスファルトの道が一直線に遠くの砂漠へ抜けていく。道の左右にはこのご時世で珍しく原形を残したままの家々が並ぶ。もしかしたら人がいるかも知れない。人がいるということは食糧もあるということだ。

広場の中心にある台座はオブジェでも建てていたのだろう。台座を迂回してメインストリートに出ると家屋の内部が見えてくる。手付かずのまま雨風と砂に晒され廃れ果てていた。

人の気配はしなかった。

少しだけ期待したおかげで落胆は大きい。

「おなかすいたの？」

おかげで画面向こうの少女に悟られる始末。

「それもある。人がいないことが残念」

つまり食糧がある可能性も薄いということ、空腹を加速させるばかりで。

いつものように僕はやる気をなくしているのだった。

「それでも探すんでしょ？」

肯定の代わりに近場の家屋を覗く。シャッターの形跡がある。店

舗だったようだ。

店内は薄暗く埃っぽい。この街に駅向こうが水没していて湿気があるが、カビ臭さがしないのを見るとほとんど砂に浄化されているのだと思う。

ざっと見渡してイスやテーブルが散乱していることから判断して食堂だったのかもしれない。カウンターの奥には調理場があるはずだ。

ガレキや木材を避けながら歩いてても、なにかをバキバキとブーツに踏まれて壊れていく。

調理場はもつと酷かった。タイル張りはことごとく破壊され、割れたタイルに皿も混じって危険地帯と化していた。銀色の大きな冷蔵庫を発見したが、そこまで行くのも一苦労する。

冷蔵庫を開けると朽ちた食糧があった。

「良かったね」

「……良くない。ぜんぶアウト」

「あちゃー」

所詮は他人ごと、次元が違う存在には飢えの苦しみは分かるまい。しかし、包丁など使えそうなものは残っているので回収しておく。他も当たってみるぞ」

人のいそうな場所を探すために荒れた店内を抜けて外へ出る。

雲行きが怪しく、今にも降り出しそうだ」

「あ、雨だ」

画面にポツリと一滴。

そのあと土砂降り。

あわてて僕は近くの店の軒下へ避難する。

「久々の雨だ。街の中にいて良かったよ」

「うん。私も水に濡れたらどうなるか分かんないもん」

電池の切れないスグレモノ機械でも水には弱いのかも知れない。

少女と出会ってからも旅は続けているが、出会うまでの旅よりも楽しい旅となっている。

雨音の中にもものともものが擦れる音が聞こえる。

「……聞こえた？」

「……聞こえた」

店の奥からだ。土砂降りから隠れた店は何を売っていたのかは分からないが、それなりに片付いているのでもしかしたら人がいるのかも知れない。

つまりそこには食糧があるという可能性がある。

「食べ物のことから離れたら？」

「人の心を読むな。というか、それ以外に考えられない」

店の奥へ進む。一段上がったところの奥の部屋があった。

そこに紅い服を纏った人が横たわっていた。

死んでる？

「大丈夫ですか？」

返事はない。

迂闊に近づいて振り返ちに遭うことを警戒していたが、生きている感じがしないので胸をなで下ろす。

少女が驚いた表情をしながら不思議な電波を感じ取ったことを訴える

「生きてるも何も、この子は自動人形だよ」

持ち主のメンテナンスを受けられずに壊れたまま沈黙する自動人形に少女は悲しげな目を向ける。

人ではない者同士通ずるものがあるのだろうか。

自動人形も存在し、高度な文明社会を築いた人間も今では砂と化する病の蔓延でめっきり減ってしまった。あつという間に文明崩壊。文明社会も栄華の夢に過ぎず、砂漠化した世界のどこかに点在して集落を作る程度だ。

旅人やキャラバンが集落を転々として情報や文化が伝わる。

僕のような人間は旅人とは呼ばない。ふらふらと集落や廃墟を巡っているだけだから、たぶん漂流者と呼ぶと思う。

廃墟には自動人形だけが人のように砂にならずに稼動し続け、こ

の店の中のように片付いた状態にすることがある。

自動人形との交信が終わったらしく、少女が僕を凝視する。
だから凝視し返してみた。

「ちよっ……そんなに見ないでよ」

照れ隠しに顔を背けつつ自業自得なことを言う。

「さー、食糧探すよ」

僕は店を抜けていくと雨に濡れたアスファルトが見える。雨はすでに止んでいた。

雨上がりの澄んだ空気を吸い、今日もまた漂流を続ける。

(後書き)

肉体のない少女を描くのは大変です。描写の練習を込めていますが、
まだまだぎこちないかな汗

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5838s/>

廃墟と電子の妖精とドリフター

2011年4月19日08時10分発行